

被災地研修を通じた高校生への市民性教育の可能性
—藤沢市「被災地でつながろう 考えよう サマープログラム」の事例から—

古 田 雄 一*

**Possibility of Citizenship Education for High-school
Students through Study Program in Disaster-stricken Areas:
Through a Case Study of Summer Program Conducted by NPO
and Local Government in Fujisawa City**

Yuichi Furuta*

Abstract

The purpose of this paper is to investigate the possibility of a citizenship education program that integrated a study program in disaster-stricken areas. The paper uses a case of a summer program for high-school students in Fujisawa city, conducted by NPO and local government.

The program influenced and empowered the participants in various ways. They gained deeper understanding and awareness of what happened on the day of disaster, as well as the current challenges in disaster-stricken areas. Some of them even started to take actual actions. These changes are significant in terms of youth civic development.

There were some keys that triggered these changes: i) encounter with the experiences and challenges of people in disaster-stricken areas, ii) interaction with those who have stood up and take actions to make change, iii) environment that accepts and encourages youth's voice and action.

キーワード

市民性教育、東日本大震災、被災地、高校生

1 はじめに

本稿の目的は、神奈川県藤沢市の高校生を対象として行われた、東日本大震災の被災地での学習や体験を通じた市民性教育プログラムの事例分析をもとに、こうした実践の可能性について考察することである。

*ふるた ゆういち：大阪国際大学短期大学部講師 〈2018.7.6受理〉

高校生を対象とした意識調査では、自尊感情の低さや、自身の参加を通じて社会に影響を与えられるという効力感が低い傾向がしばしば指摘されてきた（日本青少年研究所 2009, 国立青少年教育振興機構 2015）。背景には、彼らの日々の生活や育ちの過程において、自身も社会を形作る一員であると実感できる経験や、社会で格闘しながら生きる人々や場との出会いが不足しやすいという課題が考えられる（平塚 2014）。こうした中で被災地を訪れ、現地の人々と出会うことで、高校生は何を学び取り、どのような変化を経験するのか。

被災地での研修がもつ市民性教育としての可能性については、大学生を対象とした事例では少数ながら先行研究が存在する（小林 2014, 長谷川 2017, 江口 2017ほか）。そこでは、被災地での研修やボランティア活動の意義や効果として、被災地への関心の高まり、被災地の状況に関する様々な人々の視点に立った多面的な理解、ボランティアへの視野の広がり、日常生活における行動の変化等が明らかにされてきた。だが、高校生を対象とした実践事例について、同様の関心から深く迫ったものは見られない。18歳成人時代を迎え、高校生への主権者教育／市民性教育の重要性が高まる今、高校生が被災地での研修を通じてどのようなことを学び、その経験が彼らの市民性形成にいかなる影響を与えるのか明らかにすることは、市民性教育の研究や実践の発展に有益な知見をもたらすことが期待される。

そこで本稿では、藤沢市の高校生を対象に2015年に行われた市民性教育実践「被災地であつなごう 考えよう サマープログラム2015」を事例とし、同プログラムが高校生に与えた変化やその要因について考察することで、被災地研修を通じた高校生への市民性教育の可能性を明らかにしたい。筆者は、認定NPO法人と市の協働事業として行われた同プログラムにアドバイザーとして参画した。事例分析にあたっては、筆者の参与観察の記録（フィールドノート：記入日を付記しFNと略記）や、プログラムの活動報告書（『被災地であつなごう 考えよう サマープログラム2015 活動報告書』：以下『報告書』と略記）、その他打合せ記録や各種資料等を用い、可能な限り多角的な分析に努める。

2 プログラムの概要と内容

2.1 プログラムの概要

「被災地であつなごう 考えよう サマープログラム」は、藤沢市の市民協働事業である「藤沢市まちづくりパートナーシップ事業提案制度」において、平成27年度・平成28年度「高校生のシチズンシップ教育の普及事業」として採択され、認定NPO法人藤沢市市民活動推進連絡会¹⁾と藤沢市の協働事業として、市内の高校生を対象に実施されたプログラムである。「サマープログラム」は2015年と2016年の2回実施されたが、本稿では2015年のプログラム（『被災地であつなごう 考えよう サマープログラム2015』：以下「サマープログラム2015」と略記）を分析対象とする。参加者は公募で集まった市内在住・在学・在勤の高校生20名である。参加者の内訳やプログラムの実施体制は、表1の通りである。プログラムは、藤沢市市民活動推進連絡会のスタッフが中心となって進め、藤沢市青少年課

被災地研修を通じた高校生への市民性教育の可能性—藤沢市「被災地でつながろう 考えよう サマープログラム」の事例から—

の職員や大学生ボランティアも運営に携わり、筆者もプログラムアドバイザーとして2015年度の事業の準備段階から参画した。

表1 「サマープログラム2015」参加者および実施体制

事業責任者	認定NPO法人藤沢市市民活動推進連絡会 理事・事務局長
事業メインコーディネーター	認定NPO法人藤沢市市民活動推進連絡会 ボランティアコーディネーター兼震災復興事業コーディネーター
協働企画者	藤沢市
プログラム全体へのアドバイザー	筆者
協力	公益財団法人藤沢市みらい創造財団
被災地域におけるサポート	NPO法人底上げ・NPO法人石巻復興支援ネットワーク ほか、震災復興支援活動を行う市民活動団体など
実施サポート	認定NPO法人藤沢市市民活動推進連絡会 スタッフ 大学生サポーター3名
参加者	藤沢市内在住・在学・在勤の高校生20名 学年：1年生5名、2年生11名、3年生4名 在籍校：神奈川県内の公立高校4校、私立高校4校

(出所)『被災地でつながろう 考えよう サマープログラム2015 活動報告書』3-4頁をもとに筆者作成。

表2 「サマープログラム2015」の日程

事前研修	7月11日(土)	第1回 チームをつくろう
	7月22日(水)	第2回 被災地の現状を知ろう
	8月1日(土)	第3回 プログラムの内容を考えよう
	8月12日(水)	第4回 出発準備を万端にしよう
被災地研修	8月17日(月)夜	直前研修(出発直前の最終確認等)
	8月17日(月)夜 ～8月19日(水)	宮城県石巻市および本吉郡南三陸町での研修 (視察、語り部、現地の高校生との交流、ボランティア活動等)
事後研修	8月22日(土)	第1回 被災地での体験を振り返る
	8月26日(水)	第2回 報告会へ向けて
活動報告会	9月27日(日)	活動報告会

(出所)『被災地でつながろう 考えよう サマープログラム2015 活動報告書』を参考に筆者作成。

このプログラムの目的は、「藤沢市における次世代の若者を育成することと、被災地と藤沢の高校生同士の交流を通して、様々な課題に立ち向かう被災地の若者と藤沢の若者を結ぶこと」、またそれにより「藤沢の高校生たちが地域や社会の課題に目を向け、高校生自身が解決に向けた取り組みを行う機会」を作ることとされる(『報告書』p.3)。このプログラムにおいて参加者の高校生は、東日本大震災の被災地域を訪れ、震災当時のことや被災地の現状を知り、また現地の人々、特に被災地の復興に向けて活動する同世代の若者と交流する機会を得る。これらを通じて、一人ひとりが自身にできることを考え、また可

能であれば何らかの行動へと結びつけていくことが期待されている。

プログラムは、被災地域の訪問前に行う4回の「事前研修」、夏休みを利用して2泊3日で行う「被災地研修」、訪問後に行う2回の「事後研修」、そして「活動報告会」で構成される(表2)。被災地研修では、宮城県石巻市および同県本吉郡南三陸町を訪問した。なお、活動報告会終了後も、参加した高校生の一部による自発的な活動が生まれ、筆者を含めスタッフの一部が継続的にサポートを行った。

2.2 研修内容

(1) 事前研修

事前研修は、7月以降に4回に分けて実施された(表2を参照)。

まず初回には、異なる学校から集まった参加者が、互いのことを知り、交流を深めるため、いくつかのワークを実施した。ここでは、参加者一人ひとりが、被災地訪問に対する思いや動機、背景などについて率直に語り合い、互いの理解を深められる関係や風土の醸成が意識されていた。

続く第2回以降の研修では、参加者は分担して被災地の現状を調査し、現地で行ってみたい活動についてアイデアを出し合った。ここで出たアイデアを踏まえ、いくつかのチームに分かれてその準備を行った。具体的には、研修全体を通じての学びを記録し、発信することを目指す「記録・伝えるチーム」、プログラムの一部の企画を行う「さんさん商店街・ポータルセンターチーム」「南三陸町交流チーム」「石巻街歩きチーム」の計4チームに分かれ、企画や準備が進められた。部分的とはいえ、参加者自身がプログラムの企画・運営に参画できる機会が設けられたのは、研修自体に受け身ではなく、主体的に参加してほしいという思いからであった。

(2) 被災地研修

被災地研修では、宮城県本吉郡南三陸町(2015年8月18日)、宮城県石巻市(同8月19日)の2地域を訪問した。両地域はともに宮城県東部に位置し、海に面している。南三陸町は観光や水産業の町として知られる。石巻市は、県内第二位の人口を擁する、県内有数の都市である。

石巻市と南三陸町は、いずれも2011年の東日本大震災で大きな被害を受けた地域であった。石巻市(震災前の人口160,826人)では、死者3,554人・行方不明者422人、住宅被害は全壊20,043棟・半壊13,049棟、南三陸町(震災前の人口17,249人)では、死者620人・行方不明者211人、住宅被害は全壊3,143棟・半壊178棟と、その被害はいずれも甚大なものであった²⁾。また、災害公営住宅の整備状況を見ても、訪問前の2015年6月末時点で、完了戸数の進捗率が石巻市24.8%、南三陸町14.1%(宮城県平均39.6%)にとどまるなど³⁾、震災発生から4年以上が経過した当時でも、復興の進捗には課題も見られる状況であったといえる。

石巻市と南三陸町を訪問先として選定した理由の一つは、上記2地域にはメインコーディネーターがつながりを持つ団体等が複数あり、各地域の状況や背景、文脈を丁寧に理

被災地研修を通じた高校生への市民性教育の可能性—藤沢市「被災地でつながろう 考えよう サマープログラム」の事例から—

解し、十分に意思疎通を図りながらプログラムを準備できることであった。また、人口や地理的条件、被災・復興状況や抱える課題など、両地域には違いもあり、そうした異なる地域を訪問することで、被災地の経験や状況を多面的に理解することも期待された。

表3 被災地研修の行程

日程	内容	場所
1日目 8月17日(月)	直前研修	藤沢市市民活動推進センター
	藤沢より移動(夜行バス)	
2日目 8月18日(火)	① 漁業支援ボランティア	石巻市雄勝町
	② 被災地視察	本吉郡南三陸町志津川
	③ 復興商店街等見学・昼食	本吉郡南三陸町「さんさん商店街」
	④ 語り部プログラム	本吉郡南三陸町「ポータルセンター」
	⑤ 仮設住宅および「編んだもんだら」の取り組みの見学	本吉郡南三陸町志津川 中瀬町仮設住宅
	⑥ 高校生との交流プログラム	本吉郡南三陸町 「南三陸まなびの里 いりやど」
	振り返り	同上
3日目 8月19日(水)	⑦「石巻海さくら」	石巻市長浜海水浴場
	⑧ 被災地視察	石巻市門脇・南浜地区
	⑨ 高校生とのまちあるきプログラム	石巻市街
	⑩ 高校生との交流プログラム	石巻市「Coworking!@Ishinomaki」
	藤沢へ移動(バス)	

(出所)『被災地でつながろう 考えよう サマープログラム2015 活動報告書』7頁。
(ただし一部筆者が加筆修正を行った。)

被災地研修では、表3に示した通り、漁業支援ボランティア(①)のような直接的な支援活動のほか⁴⁾、震災発生当時の状況や被災地の現状について学ぶ機会が数多く設けられた(②・③・④・⑤・⑦・⑧・⑨など)。18日の南三陸町のプログラムでは、津波で甚大な被害を受けた地区を巡り、「南三陸防災対策庁舎」や「戸倉中学校」などを見学しながら観光協会の方の話を伺ったほか、仮設住宅を訪問し、地区長から復興に向けた課題について伺う機会も得られた。また、生活再建のために手編みのたわし作りを行う方々との交流や、海産物の通信販売の事業を始めた方や町で活動する高校生による語り部も行われ、困難な中でも復興に向けて立ち上がる姿に触れる機会となった。翌19日には石巻市に場所を移し、海岸清掃に取り組む団体の方に震災当時の状況や現在の活動について話を伺った後、同市の復興に向けた象徴「がんばろう!石巻」の看板や被災した「門脇小学校」を見学し、避難経路となった「日和山」を実際に登る体験も行った。また、市中心部の各所にある震災関係の施設(「つなぐ館」「石巻ニューゼ」「復興まちづくり情報交流館」など)を班に分かれて訪れながら、今も震災の跡が残る街を歩いた。

これらの学習に加え、プログラムの特色の一つとなっていたのが、現地の高校生との交

流であった(⑥・⑨・⑩)。彼らの多くは、高校生目線での情報発信、地元の新聞社による子ども記者の企画への参加、地域の魅力の発掘・発信、高校生によるカフェの企画・運営のプログラムへの参加など、地域の復興のための活動に携わる高校生であった。18日夜には、南三陸町の高校生とゲームやバーベキュー、自由な語らいの時間などを通じて交流した。19日には石巻市の高校生とともにまち歩きを行い、一緒に昼食をとった後、それぞれの活動や思いについて話を聴く機会が設けられた。

このように、「サマープログラム2015」の被災地研修は、実際に被災地を訪れてその場所に立ち、現地の方々との様々な交わりの中で、それぞれの参加者が考えを深めていく機会を提供するものであった。「被災地でつながろう 考えよう」というプログラム名も、こうした特徴を端的に表現している。

(3) 事後研修・活動報告会

事後研修は、被災地研修の振り返りと、活動報告会の準備という2つの目的で、被災地研修終了後に2回実施された。振り返りでは、各自が被災地研修中に書き留めた記録を読み返しなが、現地で感じたことや学んだことを振り返るとともに、「地元に戻ってきた今、どんなことをしたいか、どんなことができるか」(『報告書』p.11)について考え、一人ひとり発表を行った。

その後参加者は、活動報告会の準備に取り組んだ。活動報告会は高校生主体で運営し、報告会の目的・内容・発表方法・時間配分・役割分担等について、高校生の話し合いにより決定した。活動報告会当日は、一般来場者・学校関係者・保護者等、36名の参加があり、研修内容の報告、参加者代表による感想の発表、高校生一人ひとりの今後に向けての宣言等が行われた。

事後研修や活動報告会終了後も、参加者の一部から自主的な活動の発案があり、そのサポートが行われた。この詳細は後述する。

3 高校生に見られた変化

「サマープログラム2015」に参加した高校生には、どのような変化があったのか。まずは彼ら自身の語りや記述をもとに分析したい。

被災地研修を終えた直後の事後研修で早速、彼らは自身の変化を語っている。参加者の大多数が、それまで被災地を訪れた経験がなかったこともあり、被災地の現実や経験を知ったこと自体が、彼らの多くにとって大きな変化であった。同時に、現地を訪れた一人として、自らの生活の中で、あるいは自らの地域において、何らかの行動をしたいという高校生も数多く見られた。以下は、振り返りの場で、何人かの高校生が語った言葉の記録である(鍵括弧内は正確な文言を表し、それ以外は趣旨等の記録)。

「現地に行ったことで、頭が変わった」。自分の中で、震災の風化が始まっていたことに気付いた。自分の友達などはもっと風化している。「僕たちは伝えられるからこそ、

周りの人に伝えて行かないといけない」。被災地の情報だけを届けるのはちょっと違う。現地に行ってもらうことに重点を置きたい。「なんとかして…何かと言われると、はっきり言えないんですけど」。(FN：8/22)

「見聞きしたことをそのままにしたい」。身近な人に話したい。ただ話すだけだと、凄かったんだね、大変だったねという反応で終わってしまう。それぞれの家族の防災のあり方を変えてほしい。(FN：8/22)

これまでは、あまりボランティアに関心がなかった。しかし「今回本当に興味を持てるようになった」。(何回も「本当に」を強調しながら) (FN：8/22)

また、被災地の現状や防災のあり方についての疑問や問題意識を抱く者も見られた。例えば、ある参加者は、以下のように現地で感じたことを振り返っている。

パッと見た感じでは、思ったより復興が進んでいるようにも思ったが、地区長の話も聞いて、「復興って何だろう…？」と考えさせられた。いろんな声があるが、正しい復興とは何なのか。行政と住民とのズレがあるのかもしれない。何かできることがあると言い切れるわけではないけれど… (FN：8/22)

中には「国の偉い人、行政のトップと直接話がしてみたい」(FN：8/22)と語る参加者もいるなど、現地で感じた疑問の強さが垣間見るとともに、被災地を取り巻く構造的な課題に目が向く高校生も少なからずいた点は、特徴的な変化でもあった。

これらの変化—被災地の現状の認識、問題意識、行動への意欲など—は、その後『報告書』に書かれた記述の随所からも読み取ることができる。以下はその例である。

実際に現地では復興している所もあれば、そう見えてまだまだ復興していない所もあったり、当時の状況を思わされる場所があって、テレビで見ているよりも生で見の方がいろんな感情が込み上げてきました。それは驚きや恐怖などさまざまでした。何よりも現地の方々の声が一番心に残りました。震災当時の状況や避難所の生活など、それまで私が聞いたことのなかった話が多く、驚きの連続でした。(『報告書』 p.15)

自分の目で被災地を見て、現地の生の声を聞き、改めて東日本大震災を知り、考えることが出来た。震災から5年の月日が過ぎようとしている今、私の生活に支障はなくメディアでの取り上げも減少しているが、今もお復興への取り組みは続いているということを忘れてはいけないと思った。城壁のような防潮堤の建設や土砂を積み上げられた平地等多くの土木工事を国が進めている現状と、住民の望む復興のカタチに違いがあるということを実地に行くまで私は知らなかった。(中略) 直接、自分自身の足で東北に行き神奈川で過ごしては気づかない様なことを沢山学べて良かった。

(『報告書』 p.14)

研修後は様々な地域のボランティア活動に以前よりも積極的に参加するようになりました。自分が行動することによって地域に貢献できるんだ、という達成感を感じました。(『報告書』 p.15)

ここまで述べてきた意識の変化は、プログラム参加前と後とでの自身の変化を尋ねた、参加者へのアンケートの数値(表4)にも見出せる。例えば、「新しい考え方に触れた」「視野が広がった」といった項目の平均値は非常に高く、被災地研修を通じた認識の変化や広がりを示唆している。また、「自分の住む地域で起きている問題やボランティア活動などに目が向いた」「自分の住む地域の防災について考えた」など、被災地での経験を踏まえ、自身の生活や地域での課題に目を向け、行動に意欲を持つといった変化を示唆する項目についても、過半数の回答者が最高値の「7」を選択している。

表4 参加者への事後アンケートの結果(7件法、N=16)

	平均	7	6	5	4	3	2	1
東日本大震災の被災地の現状を理解した	5.94	6	3	7				
自分の住む地域の防災について考えた	6.13	9	2	4		1		
自分の住む地域で起きている問題やボランティア活動などに目が向いた	6.56	11	3	2				
新しい考え方に触れた	6.81	13	3					
視野が広がった	6.81	14	1	1				
目標としたい大人に出会った	6.00	8	5	1		1	1	
仲間と話し合う技術が身についた	6.13	6	6	4				
経験したこと・感じたことを表現する力が身についた	6.25	6	8	2				
自分たちでものごとを計画する力が身についた	6.31	7	7	2				
自分たちで計画したものごとを実行する力が身についた	6.06	5	8	2	1			

(出所)『被災地でつながろう 考えよう サマープログラム2015 活動報告書』19頁をもとに筆者作成。

高校生の変化は、実際の行動にも表れる(表5)。参加者の一人が「様々な地域のボランティア活動に以前よりも積極的に参加するようになりました」(『報告書』 p.15)と振り返るように、数多くの高校生が、自分の地域で行われているボランティア活動に参加している。それらは、被災地で訪れた団体が藤沢地域で行っているごみ拾い活動や、藤沢の地域活性化の活動など様々である。また、校内新聞での発信や文化祭での物産市の企画など、自校でできる活動に取り組む高校生も見られた。さらには、復興まちづくりのあり方について自主的に調査・議論を重ね、神奈川県行政担当者に主権者教育や若者の参画の充実を提言するなど、政治的／政策志向の問題解決にまで視野を広げた長期間にわたる活

動も生まれた。

一方で、すぐに具体的な行動には移さない者もいた。それは例えば、「伝えたいが、生半可な気持ちではできない」「自分なりの考えをもっと深く持ちたい」(FN:8/22)といった考えによるものであった。ここには、被災地での経験と対峙し、理解しようという姿勢が読み取れる。実際この参加者は、班での振り返りの際、「被災地とひとくくりにしても、地域によって現状が異なるから、いろいろな被災地のことを知りたい」(FN:8/22)旨も発言している。また、別の参加者からは、すぐに行動できなくても将来につなげたいという声も複数あった。例えば将来小学校の教員になりたいという高校生は、「震災後に生まれた子に、自分の思いや体験を伝えられるようにしたい」(FN:8/22)と語った。こうした様々な形での主体性の芽生えを、コーディネーターやサポーターも丁寧に受け止めていた。

表5 プログラム後の高校生の活動

<p><学校内での活動></p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞部に所属する高校生が、被災地研修の様子を校内新聞の記事にまとめ、全校生徒や教職員に発信。参加した他の生徒のコメントも掲載。 ・生徒会に所属する高校生が、自校の文化祭で「東北物産市」を企画。売り上げの一部は被災地研修で出会ったNPOに寄付。
<p><学校外での活動></p> <ul style="list-style-type: none"> ・藤沢地域でのボランティア活動に参加。江ノ島でゴミ拾いを行う「海さくら」の活動への参加、藤沢の地産地消グルメの販売の手伝い、プログラムのサポーターが主催した地域イベントの手伝いなど。 ・被災地の教訓に学び、藤沢の防災意識を高めるための活動を行う、高校生の団体の設立。地域の防災の現状について調べ、どのような活動を行うか企画を練る。(その後事情により活動は未実施) ・高校生目線での復興まちづくりの調査・議論、行政への主権者教育や若者の参画の充実の提言。被災地研修で感じた行政と住民の意見の食い違いを手掛かりに、復興の現状について調査し、自分たちの地域で同じことを繰り返さないために平時からできることを議論した結果、住民が普段から政治・行政や社会に関心を持つことの重要性を見出し、若年層への主権者教育や若者参画の促進に取り組むことに。自校で主権者教育の企画を実施し、その成果も踏まえ提言書を作成し、神奈川県行政担当者へ提言。

(出所)『被災地でつながろう 考えよう サマープログラム2015 活動報告書』21-23頁およびフィールドノートをもとに筆者作成。

4 考察—何が高校生の変化を生み出す鍵となったのか

以上のような高校生の変化は、なぜ生まれたのだろうか。ここでは、参加者の変化を生み出す鍵になっていたと考えられる「サマープログラム2015」の要素について、高校生の記述や関係者の振り返り等を手掛かりに考察してみたい。

4.1 被災地の人々の経験や直面してきた課題との出会い

第一に、高校生の関心や問題意識を喚起し、また震災や被災地の現状に関する認識の形

成に寄与した要素として、被災地の経験や課題との出会いが挙げられる。実際に被災地を自分の足で訪れ、現地の人々と交わる経験が影響を与えていたことは、下記の高校生の記述からも読み取れる。

このプログラムで非常に多くのことを学ばせていただきましたが、何よりも実物に触れること（この場合は現地へ行く事）の重要性を痛感しました。現地で直に見た物や直に聴いたものは、新聞やテレビなどで見たものとは大きく重みが違い、自分が今までどれだけ震災のことを知らなかったのかを思い知らされました。（『報告書』 p.16）

実際に現地を見て回って、衝撃、そして報道とはあまりに違った行政の政策。それらが「悪循環」して復興を遅らせているという現実。百聞は一見にしかずとはよく言ったもので、これからの世代がこれらの状況の中で生きていくのは辛いだろうと思った。これらの状況を少しでも、例え小さな力でも変えていけたらなと思い神奈川に帰ってからはボランティアを中心に活動していきたい。（『報告書』 p.15）

現地で高校生が見聞きしたものは、ときに彼らの既存の知識や既成概念に大きく揺さぶりをかけるものであった。それが被災地の経験や現状に関する確かな認識の必要性を喚起し、また彼らの問題意識を高めていた。

また前節でみたように、高校生の問題意識は、被災地支援や自地域（藤沢市）の防災だけでなく、被災地の復興をめぐる構造的な課題などにも向いていた。プログラム後の自主的な活動にも、慈善的活動に加え、集合的・政治的な問題解決を目指す活動が見られる。これは、プログラムの中で、避難経路をめぐる問題や、仮設住宅や防潮堤の問題など、被災地が震災当時や復興の過程で経験してきた矛盾や葛藤に触れる機会があったことが関係していると考えられる。上記の2つ目の語りもそのことを示唆しており、政策提言を行った自主的な活動の出発点も、仮設住宅で耳にした復興をめぐる課題への疑問からであった。被災地の支援活動を行うだけでなく、被災地の経験に学び、その課題をともに考えていくというプログラムの特徴が、高校生の幅広い問題意識の醸成に結びついたといえる。

さらに、高校生の関心や問題意識の喚起においては、訪問地域の特性も重要であった。高校生の一人は、以下のように振り返る。

私が今回、研修に行ってきたと思うことは、震災や被災地への考えが大きく変わったことです。実際に現地に行き行ってわかることがたくさんありました。（中略）今まではすべてが遠い所の話だ、人事だと思っていたのですが、学校が海に近いこともありとても身近に感じられるようになりました。（『報告書』 p.16）

藤沢市やその周辺地域は、海に近い場所に位置する。津波をはじめ、東日本大震災の被災地が経験してきた様々な困難は、震災が発生すれば藤沢でも起こりうる、将来の潜在的な課題でもあった。そのため、高校生にとって被災地の経験は「他人事」ではなかったのだ

ある。

このプログラムでは、経験や状況の異なる2つの被災地域の訪問を通じて、一方では参加者の日常と断絶した現実に触れながら、他方では日常と地続きであることを感じ、自身にできることを考えるという、多層的な学びの要素が構造的に組み込まれていたといえる(図1)。先に訪れた南三陸町では、日常とかけ離れた被災地の現実「圧倒されている」(FN:8/18)高校生が多くいた。それは被災地の現実深く浸り、対峙している証拠でもあるが、この経験を自らの日常に再び接続させていくことも大切となる。その点で、翌日のプログラムは、藤沢市と種々の環境条件が比較的近い石巻市を訪れ、困難な中でも立ち上がる様々な人々や高校生の姿にも多く触れることで、被災地での経験を日常に接続させていく内容となっていたといえる(詳細は次項で触れる)。加えて、先の高校生の変化でもみたように、「被災地」と一口に言っても多様に異なる状況や経験を理解する上でも、こうした複数の地域の訪問は重要な意義があったと考えられよう。

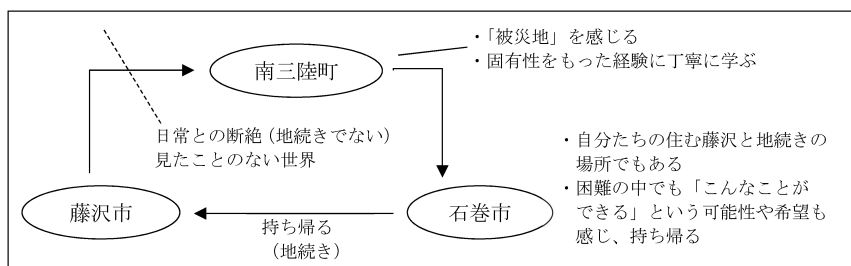


図1 プログラムにおける訪問地域の関係性

(出所) フィールドノート(FN:2/18)をもとに筆者作成。

このように、自らの地域が今後経験しうる課題と地続きでもありながら、これまでの日常では触れることのなかった、被災地の人々が経験した様々な困難や矛盾に触れることが、高校生の関心や問題意識を強く喚起し、また地域の抱える課題への認識を深める契機になっていたといえよう。

4.2 被災地で復興に向けて行動する同世代との出会い

第二に、プログラムに参加した高校生の行動を後押しした重要な要素として、被災地で復興に向けて行動する人々との出会い、とりわけ同世代の高校生との出会いが挙げられる。実際、数多くの参加者が、被災地の高校生との出会いの影響を述べている。

研修で一番私が印象に残っていることは、被災地の高校生です。同じ高校生とは思えないほどたくましくて、沢山の活動を自らが立ち上げ復興に向けて前進していました。(中略)お話を聞かせてもらった際には、前向きな言葉を沢山いただきました。そして研修後、私にも何かできないかと考える機会が増え、勇気や前向きな気持ちを

持てるようになりました。今後は、近所の海である「海さくら」のビーチクリーン活動に積極的に参加したり、近所のおじいさんが毎朝川沿いでごみ拾いをしているので、そのお手伝いをできたら良いなあと思っています。（『報告書』 p.14）

私は最初、ただの好奇心とか本当に軽い気持ちで参加しました。（中略）あらゆる方々の話を聞き、私達と同世代の方々の話を聞き、「同じ人間で、同じ人生を同じように楽しく過ごしたかったはずなのに」家族や友達、大切な人を失いそこから立ち上がった被災地の人々は本当に強いんだなあと思いました。トラウマになってしまうはずなのに、私達に丁寧な全てを話してくれて。どうして私は今までテレビやネットで見ただけの情報しか自身の頭に入れず「どうせもうみんな元気なんですよ」などと勝手な解釈をしていたのでしょうか。どうして「私に何か、小さなことでもできることはないか」とは考えられなかったのでしょうか。（『報告書』 p.18）

東北の高校生たちは、驚くほど積極的に、そして明るく生きていました。4年前の3月11日に僕たちが想像もできないような辛く苦しい経験をしたにもかかわらず、彼らは悲しむ様子をあまり見せないのです。それどころか大人たちに代わり自分たちが未来を切り開いていこうと、さまざまなアクションを起こしていました。現状に満足し、毎日を受け流して生活していた僕にとって、彼らの行動力と今を疑う力は凄まじい衝撃となり、僕も行動を起こして社会を改善したい！という気持ちにさせてくれました。（『報告書』 p.13）

これらの記述からは、困難な中でも地域の復興に向けて活動する同世代との出会いが、参加者の（被災地の）「高校生」像についての既成観念を揺さぶっていたこと、また高校生でも行動を通じて変化をもたらせるという考えを形作る契機となっていたことがうかがえる。同行した市職員も、「目を背けたくくなるような現実を前にしても、ひたむきに前に進んでいこうと活動する現地の高校生の姿は、何よりの起爆剤になったのではないのでしょうか」（『報告書』 p.25）と振り返る。

一方で、現地の高校生について、ある参加者は、「もともとこの町が好きで、震災があったから、というのではなく、なんとなく、とか誘われて、なんだなと思った」（FN：8/19）と語っている。行動する被災地の高校生も自分と遠く離れた存在ではないと親近感を抱いていることがうかがえる。実はこのことは、企画者側も大切にしたいと準備段階から感じていた点の一つであった。石巻市の高校生との事前相談でも、そうした考えが共有されている。

「“シャキーン”に見える子も、案外“シャキーン”でもないよ、というのを見せるのが大事」。自分とは離れた凄い存在に見えてしまうと、“自分には無理かも…”とと思ってしまい、かえって無力感につながることも。身近に感じられる大切さ。（FN：2/17）

このような考えから、実際の被災地研修でも、石巻市の高校生による話では、活動の紹介だけでなく、活動に至るまでの経緯や思いなども語られた。そこでは「誘われて、見学とかして、やってみたいなと思った」「楽しそうだなと思った」「リーダーシップとか習ったけど、あんまよくわからなかった。でもそこに来ている人たちと話して楽しかった」(FN:8/19)といった等身大の言葉が語られていた。参加者にとって、こうした語りは自身と被災地の高校生を結びつける接点となったと推察される。南三陸町の高校生とも、バーベキューやゲームによる交流が盛り込まれ、関係を深めていた。これは「被災地の高校生も友達が欲しい」(FN:2/18)という声に応えるものでもあった。

このように、藤沢の高校生と被災地の人々との関係性は、〈支援する側—される側〉という関係性から、被災地に学び、ときに後押しされ、被災地とともに行動していこうとする相互的な関係性として(再)構築されていったといえる。参加した高校生の事後の活動が、被災地支援だけでなく、地元のボランティア活動への参加や自地域の問題解決にも広がりを見せたことも、その証左といえる。以下の記述から読み取れるように、高校生が従来抱いていた被災地への既成観念を転換し、自身と被災地との関係性を編み直す契機となっていたのも、被災地で立ち上がる人々の姿であり、同世代の高校生との出会いそのものであった。

この研修での私の初期の目的は、東北の今を知り、前進や復興の後押しをすることでした。けれど実際に東北に行き、東北の人々と関わる事で、私が本当にすべき事に気付くことが出来ました。今の生活に不満が無いという訳ではないにしろ、東北の人々は私達が思うよりずっと強く、「一緒に頑張りましょう」なんて言葉はまるでお門違いのように、とっくに自分たちの足で前に進み始めていたのです。(中略)そして特に、私と同じ年の高校生が自分達で団体を立ち上げ、能動的に地元へ働きかけている姿は、私の中の地元との関わり方の認識に大きな影響を与えました。東北から戻った後、出来る限り多くの地域イベントやボランティアに参加し、自分なりの地域への貢献を考えてみた結果、町の防災意識向上に辿り着きました。東北の人々の「経験」を離れた土地でも活かせるよう、積極的に動いていきたいと思っています。(『報告書』p.15)

以上のように、復興に向けて動く高校生をはじめとした現地の人々との出会いは、参加者の高校生と被災地との関係を編み直しながら、参加した高校生をエンパワーし、その後の様々な活動を後押ししていたといえる。

4.3 声の表出や行動への意欲を受け止め、後押しする環境

第三に、ここまで述べてきた被災地での経験に加え、現地で抱いた問題意識や行動への意欲を受け止め、後押しする環境も、高校生の変化において重要な要素であったと考えられる。

初回の事前研修において、参加者が互いの関心や思い、参加への動機などを語り合う時

間を観察した筆者は、次のような記録を残している。

自分が関心を持っていることを聴いてくれる／受け止めてもらえる仲間と場。皆が関心を持っている／聴いてくれるからこそ、信頼して話せる。(FN：7/11)

参加者の一人が「ここではこういう話ができる」(FN：7/11)と呟いていたことから示唆されるように、学校等とは違い、被災地を訪れるという一定の共通関心をもつ人が集まったコミュニティは、それぞれが自身の率直な思いや考えを発する助けとなっていた。このような環境は、以後の活動の足場となっていく。

またこうした仲間との関係は、被災地研修を経て新たな意味も帯びることになる。それは、ともに被災地研修に参加し、経験を共有した仲間という意味である。高校生の一人が「多くの点で成長を感じることでできる研修でしたが、特にこの20名の仲間と知り合えたことは確実に人生の財産となると感じています」(『報告書』p.13)と述べるように、こうした仲間を得たこと自体、高校生にとって貴重であったようである。加えて重要なのは、被災地で同じ時間を共有したからこそ、互いの思いや考えを理解し、応援し合える仲間となっていた点である。こうした仲間は「来年、また再来年、またメンバーで被災地に行きたい」「ボランティアを立ち上げる人がいたら、同じ時間を経験できたから参加したい」(FN：8/22)と、ときに行動への意欲を後押しする存在でもあった。後述の通り、経験を共有していない学校の友人等とは、必ずしもそうした思いや問題意識を分かち合うことは容易でない。だからこそ、被災地を訪れた仲間と集い、思いを確認できるコミュニティは、被災地研修での学びをその後の日常生活で途切れさせず、継続的な学習や活動を支える場として重要な役割を果たしていたと考えられる。

また、プログラムに参加した仲間に加え、事前研修から事後研修・報告会までの過程に参加し、高校生の学びを支えた大学生サポーターの存在も重要であった。事業のスタッフの一人は、次のように振り返る。

学生サポーターがプログラムに関わることの意義はとても大きいものでした。(中略)高校生の少し上のお兄さんお姉さんとして、積極的に意見を引き出す等の役割を期待していましたが、関わってくれたサポーターには想定以上のことをしていただきました。プログラム中、自分の意見を話したり、全体で発表する機会が多くありましたが、意見を安心して言うことのできる場ができたからこそ、事後研修・報告会と、各自が現地で学んできたことや感じたことをそれぞれの言葉で表現できていたと感じています。(『報告書』p.25)

サポーターをはじめ、コーディネーターや市職員、筆者など、プログラムに携わる関係者の間では、高校生一人ひとりが安心して自身の考えや思いを発することのできる環境を整えることが意識されていた。例えば、事後研修を通じて生まれてきた高校生の自主的な活動の案に対して、筆者は次のように記している。

あまり大人が先回りせず／否定せず、まずは聴く、一緒に考える。今あまり言うのと、「折れる」かもしれない。言葉尻を捕らえず、何を解決したいのか見極めよう。どうやったら実現する方向に向かうのか、一緒に考える存在が必要。(FN：8/26)

また、研修後の高校生の活動においては、藤沢市の市民活動のコーディネートや支援を行うNPO法人の職員であったメインコーディネーターを中心に、高校生が活動を実現していくための資源を必要に応じて提供できたことも、彼らの活動の幅や実現可能性を膨らませ、行動の支えになっていたといえる。このように高校生の問題意識の発露やそれらに基づく行動を積極的に後押しする環境は、彼らが無力感を払拭し、自身の参加を通じて地域や社会に影響を与えられるという感覚を獲得する鍵であったといえよう。

以上のように、参加者同士のコミュニティや周囲の支援的な環境は、高校生の主体性の発揮に貢献するとともに、被災地での経験を一過性のものにせず、その後の継続的な学習活動を促進していたといえる。ただし、課題も見られた。以下は、ある参加者の記述である。

被災地で実際に見たものや聞いたものは、私の人生観に衝撃を与えました。特に、高校生が運営する施設や「海さくら」という藤沢と石巻を繋ぐ活動にはとてもワクワクして、私もやってみたい！という気持ちになりました。しかし、私の周りにはそういった活動に関心のある人はなくて、被災地研修から帰ってきた私は、自分が変なのかと不思議で複雑な気持ちになりました。そして、何も動き出さないまま半年経った今、「鉄は熱いうちに打て」と言っていた宮本さん〔注：事業のメインコーディネーター〕達の言葉は本当だったなと思います。それでも、私がサマプロの研修を通して見たもの、聞いたもの、感じたことは私の中から消えることはありません。(『報告書』 p.17)

この記述は、被災地研修での経験が、その後の学校等での日常生活と断絶してしまうという課題を浮き彫りにしている。被災地研修に参加した高校生がそこで経験をその後の生活に有機的に結びつけ、自身の問題意識や行動への意欲を持続できるよう、プログラム参加者のコミュニティに加え、学校をはじめとした周囲の積極的な支援や連携も重要といえよう。

5 おわりに

本稿では、「サマープログラム2015」の分析を通じて、被災地研修のもつ市民性教育としての可能性を考察してきた。分析から明らかになったのは、一人ひとりが安心して自身の考えや思いを分かち合えるコミュニティを足場としながら、被災地での様々な経験や出会いを通じて、市民としての社会認識や問題意識、行動への意欲をともに育んでいく高校生の姿であった。こうした機会や環境は、高校生の視野を大きく広げ、社会を形作る市民

としてのアイデンティティ形成に寄与するといえよう。

ただし、こうした被災地研修を組み込んだプログラムは、とりわけ学校内の教育活動として行われる場合、被災地を「利用した」学習に陥る危険性を孕むことに留意したい。被災地の経験を「教材」化する過程で、学習内容を都合よく編集し、被災地における複雑で多様な経験を削ぎ落していないか、慎重に向き合う必要がある。また、被災地の人々が一方的に学習活動に協力するという形ではなく、双方にとって意味のあるプログラムを目指すことも重要である。さらに、被災地に持続的に関わりや関心を持ち続けていくための工夫も求められる。

「サマープログラム2015」の場合、震災発生後に宮城県に移住し現地で活動した経験を持ち、藤沢と被災地の双方の文脈を深く理解するコーディネーターの存在が、こうした課題を一定程度乗り越える助けになっていた。また、被災地の土地やそこに住まう人々との「出会い」や「つながり」を通じた学びを基盤に据えた本プログラムは、学習を一過性のものにせず、被災地との関係を足場として持続的な学びや活動を促す点でも、被災地を「利用した」学習を乗り越える一つの方向性を示していると思われる。

本稿で明らかにできたのは、単一事例にもとづく、被災地研修のもつ市民性教育の可能性の一端に過ぎない。今後もさらなる実践の展開と知見の蓄積が期待される。

付記

本稿で取り上げた「被災地でつながろう 考えよう サマープログラム2015」の調査等に当たっては、藤沢市青少年課の皆様、認定NPO法人藤沢市民活動推進機構（旧・認定NPO法人藤沢市市民活動推進連絡会）の皆様にご多大なるご協力をいただきました。深く御礼申し上げます。

注

- 1) 同法人は、2017年3月より名称を「認定NPO法人藤沢市民活動推進機構」に変更している。
- 2) 宮城県「東日本大震災における被害状況 平成30年5月31日現在」
<http://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/688253.pdf>（最終アクセス日：2018年6月26日）
- 3) 宮城県「復興の進捗状況 平成27年7月11日」
<http://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/325496.pdf>（最終アクセス日：2018年6月26日）
- 4) 漁業支援ボランティアに加えて、8月19日の「石巻海さくら」（表3・⑦）でも、海岸清掃活動への参加を予定していたが、事情により内容が変更となった。

参考文献

- 江口怜「学生ボランティアは福島で何を学んでいるのか—ボランティア活動を通じた市民性教育の試み—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第3号、337-344頁、2017年。
- 藤沢市・認定NPO法人藤沢市市民活動推進連絡会『被災地でつながろう 考えよう サマープログラム2015 活動報告書』2016年。
- 長谷川万由美「大学における参加型シティズンシップ教育の可能性—災害ボランティア研修の実践を通しての考察—」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第3号、3-10頁、2017年。
- 平塚眞樹「『権利主体』までの長い道のり—社会を変えるための実践に参加する前提条件—」田中優子+法政大学社会学部「社会を変えるための実践論」講座（編）『そろそろ「社会運動」の話をしよう—他人ゴトから自分ゴトへ。社会を変えるための実践論』明石書店、36-60頁、2014年。

被災地研修を通じた高校生への市民性教育の可能性—藤沢市「被災地でつながろう 考えよう サマープログラム」の事例から—

小林功英（編）『災害ボランティア経験が持つ大学生への教育効果（高等教育研究叢書 126）』広島大学高等教育研究開発センター、2014年。

鈴木賢志『日本の若者はなぜ希望を持っていないのか—日本と主要6ヵ国の国際比較』草思社、2015年。

財団法人日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識 単純集計結果」2009年。

<http://www1.odn.ne.jp/youth-study/research/2008/tanjyun.pdf>（2018年1月5日）

財団法人国立青少年教育振興機構『高校生の生活と意識に関する調査報告書』2015年。

